

(昭和31年3月3日磐田市の自宅にて)

## 青山さんの思い出 一故名誉員 青山 士氏の追憶一

安 芸 皎 一

1958年の9月に、モントリオールで開かれた世界動力会議のモントリオール部会に出席したあとで、私は初めて南アメリカに飛び、カラカスでしばらく過したあと、リマで東大のアンデス高原学術調査団に参加した。飛行機の都合もあったのであるが、ぜひパナマ運河が見たく、パナマ乗りかえということにして、2日ほどパナマ駐在の公使のお宅にお世話になった。着いたその翌日、パナマ運河を案内していただき、クレブラの開削の見えるところまで連れて行っていただいたのであった。ガットン人造湖の畔を通ったことも覚えている。私には初めての旅行であったのであるが、私にとってききなれたこの土地の名前は、全く夢遊の地の感を深くしたのであって、私には本当に思い出深い一日であった。

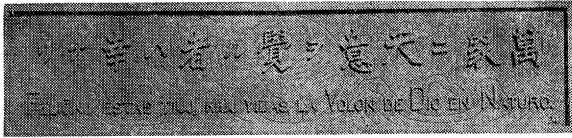
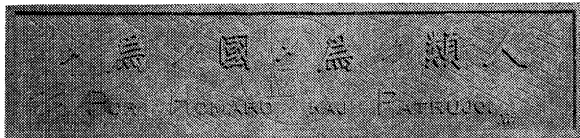
私はパナマの話をよく青山さんに伺っていたのであった。もう随分古いことになる。私は1926年に学校を出るとすぐ内務省に勤めることになり、東京土木出張所勤務ということで、ちょうどその年の国会で決定になった鬼怒川改修工事に従事することになって、その年の夏から五十里ダムの現場で、流量測量とか縦横

断測量を担当したのであった。勤めは当時渡良瀬川の工事事務所主任をしておられた村さんが鬼怒川の主任を兼ねておられたのであったが、まもなく村さんが土木局に転勤されるようになり、荒川上流の工事事務所主任をしておられた青山さんがこれに代られたものであった。なんといてもこの五十里ダムは日本で最初の洪水調節を主とした多目的ダムということなのであって、物部先生のご指示で、アメリカのオハイオ州の当時問題になっていたマイアミ河の洪水対策計画を一生懸命勉強したことを覚えている。青山さんは五十里に時々こられた。一度湯西川をのぼり、湯西川温泉に泊ってから鬼怒川にでて湯本に泊り、鬼怒川を下って東電の黒部ダムを見て川治にでて旅で青山さんのお伴をしたことがあった。もともと山歩きの好きな私は、これもお元気な青山さんのお伴をするのが楽しみなのであって、いつも山においでになるのを、いつかいつかとお待ちしているのであった。

私はその年の秋に、五十里の調査測量も大体一段落となり、下流の調査ということで、秋も終わった頃に山を下り、茨城県の宗道に移って鎌庭捷水路の調査に従事することになった。青山さんが最初に鎌庭にこられたのが、暮もおしせまった12月25日、その日は下流の水海道までお伴したのであったが、道を走っておりながら、昭和改元の日であるということを知ったのは、今になってもついでこの間のことのように思えてならない。翌年の春には鎌庭捷水路の調査も一応終わったので私は鬼怒川改修

事務所のできたばかりの新しい事務所に移った。川島駅前の雑貨屋の離れを借りておちついた。鬼怒川と兼任の青山さんはその頃大体月に10日は川島にこられるようになったのである。青山さんは村で一番大きな家の一室を借りておられたのであったが、そこでは食事をたいてくれないというので、いつも私の下宿にこられて夕食をご一緒にし、それから青山さんの泊っておられる家の風呂の方が私のところよりはるかにきれいだというので、風呂は私の方にこいといわれ、よくお伴したものであった。

青山さんが新潟土木出張所の所長にご栄転になったのはそれからそれほど長いことではなかったのであるが、このしばらくの間は私にとってはいろいろとパナマの話を伺う何よりの機会であったのである。学校を卒業されるとすぐ広井先生の紹介状一本持たれて三等船客で渡米された。パナマ運河の開削が予定より少々遅れたので、それまで鉄道会社に仕事を見つけて働かれたのであったが、主として測量であり、測量器をかついで、ポールを持ったアメリカ人の工夫と歩くのに、なかなかついてゆけず、一苦勞したよ、というお話を今でも覚えている。測量器は測量する人がかついで自分ですえつけるのだというお話はその当時の私にはピンときたのであって、私はそれから器械は、自分ですえつけることにしたのであった。私はしばらくの間、自分で水準測量や流量測量をやっていたので、本当にこれは身にしてみても感じたのである。青山さんはパ



ナマに移られてからも、初めのうちは測量班の班長として、あいかわらず測量をつづけておられた。パナマのジャングルの中の測量であって、テント生活。班員がつけてきた野帳をランプの下で計算し、これを翌朝までに整理しておいて、朝班員に野帳を渡すのであった。私はそれから寝たのですよと、いうお話は今でも私の記憶にはっきりと残っている。その頃私が水虫に困っていたとき、青山さんは自分もこのテント生活では水虫に苦しめられたといわれ、足指にバターを塗るとよいと教えてくれたのであったが、よかったように思うから、あなたにもすすめるよ、といわれたことがあった。このパナマ運河はレセップスがスエズで成功してから19世紀の終りに、この運河の開削を始めたのであったが、今度はそうはゆかず、黄熱病のまんえんなどもあって、ついに放棄したのであり、アメリカ隊がここにはいったときには、多くの長梯子式掘削機が全くジャングルのなかに捨てられてあったということであった。このフランス式の長梯子掘削機というのは日本政府が今世紀の初めに信濃川の大河津の分水路を開削するときにフランスから輸入したものであり、これは後になってのことであるが、「かくして山は動いた」というパナマ運河開削史を読んだとき、このジャングルのなかに捨てられた掘削機の写真をみて、青山さんのお話を思い出したことがあったのである。余談になるのであるが、青山さんは新潟土木出張所長になられてから大河津の分水路のベアー・トラップ堰が壊されたあとの復旧工事を管

下に持たれたわけであるが、この分水路の掘削土量はクレブラの掘削のほぼ1/4といわれ、私はたまたま小学生時代を新潟で送り、この開削工事の最盛時期には、時々ここを訪れる機会を持ったのであって、私には特になつかしい思い出の機械なのであった。

青山さんはそれからガットン・ダム建設に従事せられ、これを終えて日本に帰られたのであった。このダム建設にあたっては副技師長の地位におられたように記憶している。ここに働いていた唯一の外国人技師であったというお話が強く印象づけられているのであった。パナマ運河の一日は私にとっては本当に何よりの日であったのである。そうしてわずかではあったが、この川島での生活は私にとってまた何よりの日々であった。私はちょうどその頃鎌倉の捷水路の設計を分担していたのであったが、一応土木局で決められていた案にしたがって河幅を決め、土地買収を行なったのであったが、この断面の形は初めは掘削土量を最少にして予定の高水流量を流し得られるよう決められていたのであったが、青山さんは川は上から下に流れるのだこの流れのなかに上下流と全く無関係な形が存在するということがほとんどになるのであろうか、少し位は掘削土量が増えてもよいから、もう少し、上流、下流との関係をつけたらどうだろうといわれ、そこで私は捷水路の上下流10km余りの断面を幾つか積みかさねてみて、大体適当と思われる常水路の敷幅とかその高さを決め、断面を決めたので

あった。このご注意は私にとっては本当に何よりのものであったのである。私の物の見方に大きな影響を与えたのであって、私は川を知るには何を知らなければならないかということを実に示唆していただいたと今でも思っている。

思えばもう随分古い話である。もう36~7年も前のこととなる。この間学会誌で青山さんのご逝去を知った時に(1963.3.21, 逝去)、私の心の中を走ったのはこの古い思い出なのであった。パナマでのジャングルのなかの生活から学校を出たばかりの私への仕事の上でのご教示はその後の私の考え方に一つの強い方向を与えていただいたと今でも思っている。私が最後に青山山にお目にかかったのは何日であったか、はっきり思い出せないのであるがバンコクへ赴任するしばらく前に、建設省の中部地方建設局の三浦さんの案内で、大井川を渡って、中山峠を越え、磐田のお宅に青山さんをお訪ねしたことがあった。私の国連赴任を喜んでいただいたことを思い出したのであった。私のバンコク生活もこれで2年8ヵ月、もう近く帰国の予定にしているのであるが、青山さんにお目にかかってご報告することのできないのが本当に残念である。

(バンコクにて7月・記)

[筆者：工博 前国連 エカフエ 水資源 開発局長]

カット写真：信濃川補修工事記念碑  
[注] 安芸氏は去る10月5日 空路帰国された。

なお、青山 士氏の略歴・その他については下記のものを参照されたい。  
本誌第47巻第1号「話のひろば」  
本誌第48巻第5号「口絵写真」